

会を作りだす以外の働きをもっていない。

イスラム法は法であると見做されているとはいえ、その名に値するとはとうてい言い難い。法というものは、本来的には絶えざる変化に晒されているものであって、人間の倫理的、漸進的な変化をじゅうぶん考慮したものでなければならぬ。イスラム社会におけるイスラム法をめぐる議論は、たんにそれに賛成、反対といった類いのものではない。それは、イスラム法という言葉の意味しているもの、さらには、それがいかなる洞察力によって制度化されなければならないのかといった問題について、きわめて複雑で実に多様な分裂状態に陥っている。イスラム法は、概念上の用語からすれば、イスラムに固有のものであって、そうした意味合いからすれば、すべてのイスラム教徒に遵守を要求する資格をもっている。たとえそうだとしても、それは、多くのイスラム教徒にとって、自らのアイデンティティーの源であるイスラムへの愛着、さらには、社会正義に関する自らの見解を表明する手段としては実に曖昧な「省略表現法」にはかならない。そのゆえにこそ、イスラム法は、政治的なスローガンとしては実に効果的に機能する。イスラム教徒に、一般的な意味合いにおいて、イスラム法に反対するよう求めることは、その人に罪を犯すよう誘いかけることとさほど違わないからである。だが、数多くの国々において過激なイスラム運動が振りかざしているイスラム法なるものは、現代社会にはわずかの関心しか払わず、改革や啓蒙をけっして認めようとはしない一つの法体系にすぎない。こうした復古的なイスラム法が権力と結合し、それを推進した人々が現代社会が抱え込んでいる深刻なジレンマと取り組む手段と熱意をもっていなかったとしたら、彼らは、汚染されていない純粋な市民生活という、想像力の産物に過ぎないヴィジョンを廻りどころとし、彼らが言うところの「現代社会の問題」をそのヴィジョンに固有

◆ナイジェリアのイスラム法

二〇〇二年の三月、アミーナ・ラワルの名は全世界に知れ渡った。離婚歴のある三〇歳の女性アミーナは、ナイジェリア北部のカツィナ州のパクーリーのシャリーア法廷において、婚姻によらずに子供を出産した廉により石打ちの刑による死刑を宣告されたからである。子供の父親にたいする告発は、父親は自分であるとの自白を撤回した段階で取り下げられた。

これは、シャリーア法廷が石打ちや手足の切断といったフドワード刑を科せようと努めている数多くの判決の一つにすぎない。「限界」を意味する言葉の複数形であるフドワード刑は、コランに由来しているとはいえ、そうした刑罰そのものは、その後の歴史におけるイスラム法の発達の産物である。

ナイジェリアが一九九九年に文民統制に復帰してからこのかた、同国の北部の一一の州は、イスラム法を施行してきた。イスラム法は、アフリカでもっとも人口稠密な、また、数多くの部族が入り乱れて暮らしている国家において共同体相互の問題ばかりでなく、政治的な問題にもきわめて厳しい刑罰を科している。

しかしながら、下級裁判所が下した判決は上訴することができる。こうした判決は、また、イスラム教徒ナイジェリア人にたいする刑罰が非イスラム教徒ナイジェリア人より厳しいものであってはならないと主張しているナイジェリア連邦共和国の当局による政治的な圧力と憲法上の異議申し立てにも直面している。姦通の廉で石打ちによる死刑を宣告されたサフィヤ・フセインの判決は、上訴によって破棄されており、カツィナ州の上訴裁判所で扱われることになったアミーナ・ラワルの判決は、その審議が凍結されている。こうした上訴のプロセスは、その種の判決が未決として扱われ、被告は保釈され、刑は、実際には執行されないことを意味している。